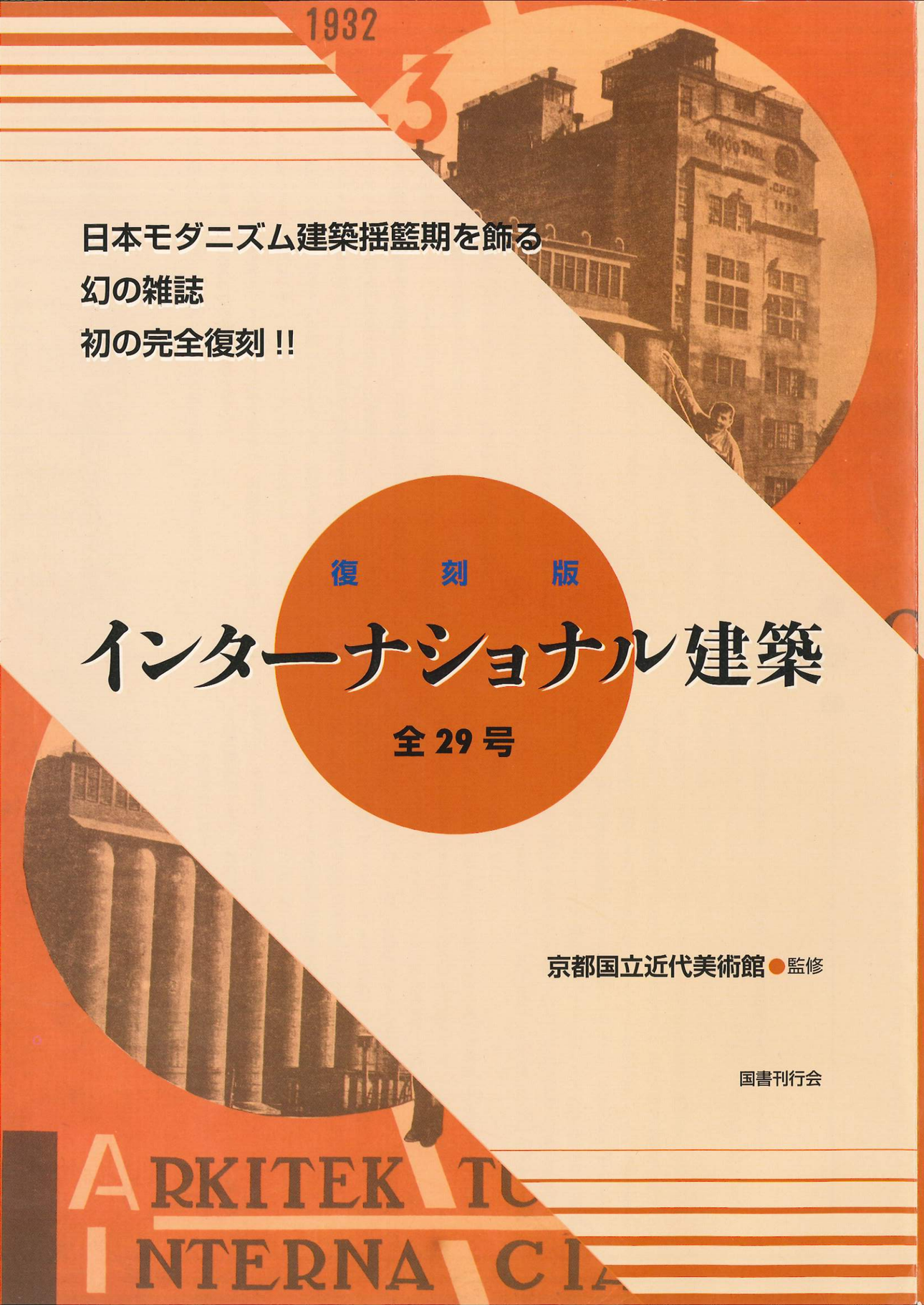



日本モダニズム建築揺籃期を飾る
幻の雑誌
初の完全復刻 !!

復刻版

# インターナショナル建築

全 29 号

京都国立近代美術館●監修

国書刊行会

復刻版 インターナショナル建築
全 29 号＋別巻 1

監修●京都国立近代美術館

執筆●岩城見一（京都国立近代美術館長）
笠原一人（京都工芸繊維大学大学院助教）
川島智生（建築史家）
山野英嗣（京都国立近代美術館主任研究員）

（原本書影）

## 体裁・造本

A4 変型判・上製クロス装・セット函入
全 29 号合本＋別巻 1 冊
揃定価：本体 68,000 円＋税
ISBN978-4-336-05088-5

## 本書の特徴

- 日本近代建築史において必ず言及される重要な機関誌でありながら、「幻の雑誌」としてその全容が不明だった本誌を全号完全復刻。
- 建築史のみならず、1930 年代のモダニズム文化、美術、風俗、社会史研究にも有用な第一級の基礎資料である。
- 今回復刻に当たって、インターナショナル建築会員の中尾保による書籍『インターナショナル建築』をも参考資料として復刻し、別巻に収録。本誌理解のための一助とした。また別巻には総目次及び解説論文を完備し、読者の利用の便を図った。
- 上野リチによる装飾図案など、彩色図版はすべて原色に忠実に再現。
- 関西を中心として、建築写真・図面を多数掲載。地域資料としても活用が可能。

### 本書をお薦めしたい方々

建築学・建築史研究者、日本美術史・デザイン史研究者、日本近現代史研究者、
日本社会史・風俗史研究者、日本文化史・思想史研究者の方々に。
大学図書館、公共図書館。

**2008 年 12 月刊行**

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15 http://www.kokusho.co.jp
TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427 e-mail:info@kokusho.co.jp

発行
国書刊行会

お取り扱い書店

ARKITEKTIDO

# 刊行にあたって　京都国立近代美術館

このたび国書刊行会から、京都国立近代美術館が所蔵する建築研究雑誌『インターナショナル建築』が、復刻刊行の運びとなりました。

当館は二〇〇六年度、京都インターアクト美術学校から、同校がこれまで長年にわたり保管してきた上野伊三郎（一八九二―一九七二）と上野リチ（一八九三―一九七二）夫妻の全作品・資料をご寄贈いただきました。同校の前身であるインターナショナルデザイン研究所は、一九六三年に上野夫妻を中心にして創設され、後にインターナショナル美術専門学校となり、小規模ながらも、ふたりの教育理念が活かされた特色ある美術教育機関として、有能な若い人材を多数輩出してきました。そして同校には、リチの作品とともに、上野伊三郎の未公開の建築図面資料をはじめ、数多くの蔵書も秘蔵されていたのです。

『インターナショナル建築』もこのなかに含まれ、当館ではこの貴重な篤志にこたえるため、「上野伊三郎・リチコレクション初公開　ウィーンから京都へ、建築から工芸へ」展を開催し、本復刻版をこの好機にあわせて出版することとなりました。本誌刊行の母体である「日本インターナショナル建築会」についても、あらためて関心が寄せられることでしょう。

上野伊三郎は、ブルーノ・タウトをわが国に招聘した人物として知られていますが、当館もすでに、「ブルーノ・タウト　一八八〇―一九三八」展を開催（一九九四年）し、建築・デザインなどを視野におさめた活動も館の重要な柱と捉えています。本復刻版刊行が契機となって、当館も含め、さらにそれらの総合的な研究が進展することと確信いたします。

# 『インターナショナル建築』とは何か

笠原一人（京都工芸繊維大学大学院助教）

『インターナショナル建築』は、一九二七年に京都で設立された日本インターナショナル建築会（以下、建築会）によって、一九二九年から一九三三年まで発行された機関誌である。建築家上野伊三郎が代表を務めた建築会は、本野精吾、伊藤正文、中尾保、中西六郎、新名種夫、石本喜久治らを主要メンバーとし、W・グロピウス、P・ベーレンス、B・タウト、G・Th・リートフェルト、J・J・P・アウト、R・ノイトラなど海外の建築家十名を含んだ百八十名あまりの会員を擁した。当時、日本最大の規模と広がりを誇った建築運動団体であった。

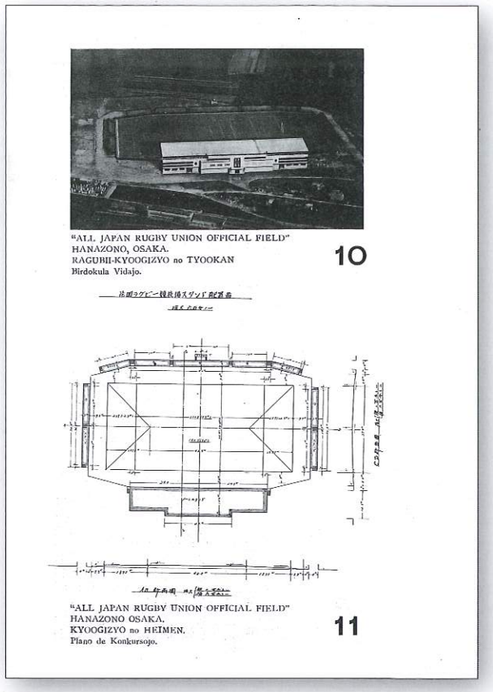
建築会の主張は、『インターナショナル建築』に掲載された「宣言」および「綱領」に端的に示されている。彼らは機能性や合理性に基づいたモダニズム建築の普及を目指す一方で、ローカリティなる概念を提唱した。当時、帝冠様式など日本の伝統的な意匠を取り込んだ折衷的な建築表現が流行していたのに対して、建築会はモダニズムの言語に基づきながら日本の風土や気候を考慮するという独自の姿勢で臨んだのであった。

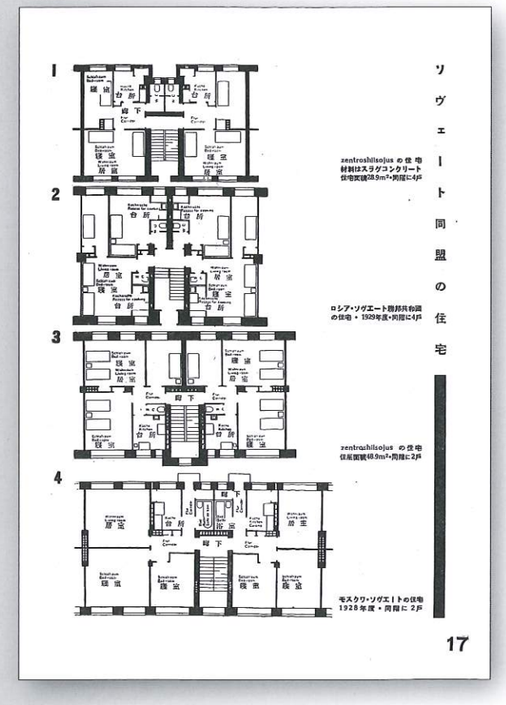
『インターナショナル建築』からは、建築会のそうした明快で強い主張が読み取れるのだが、同時に現実の社会の中で有効なモダニズムを模索しさ迷う姿も読み取れるのが興味深い。ウィーン工房のデザイナー上野リチ夫人の装飾を取り込んだ上野伊三郎の建築、本野精吾によるコンクリートブロック造の実験的な住宅、大阪市建築課に勤務していた会員によるアールデコ風の建築、ソ連の映画や建築に造詣の深い香野雄吉の途中参加など、一義的なモダニズム概念に回収し得ない様々な様相が見えてくる。しかしそれこそが建築会や関西の建築界、あるいは日本のモダニズム建築の現実の姿だったのではないか。

これまで幻の雑誌であった『インターナショナル建築』の復刻は、我々にモダニズム胎動期の建築家たちの熱い想いと試行錯誤を垣間見せてくれる。

## 上野伊三郎とは――

一八九二年、京都の宮大工の家に生まれる。大学卒業後ベルリンなどに留学、ウィーン工房のデザイナーであったフェリス・リックス（上野リチ）と出会い結婚。その後京都に居を構え、気鋭の建築家として活躍することになった。一九二七年に本野精吾らとともに「日本インターナショナル建築会」を設立し代表として活動、機関誌『インターナショナル建築』を発刊する。一九三一年設計の「スターバー」は、翌年ニューヨークで開催された「インターナショナルスタイル展」にル・コルビュジエやグロピウスらの作品とともに出品され、注目を浴びた。夫妻は京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）教授として教育に力を注ぎ、のちインターナショナルデザイン研究所を設立。一九七二年没。




色刷まで忠実に完全復刻

ページ見本（縮小 約40%）